昭和39年11月10日第三種郵便物認可　昭和41年4月5日国鉄東局特別扱承認雑誌第2343号 昭和43年2月1日発行　第5巻第2号通巻第42号（毎月1回・1日発行）

月刊漫画 ガロ

No.42
1968
2月号

カムイ伝㊳　赤目プロ作品　白土三平

鬼太郎夜話⑨　水木プロ製作　水木しげる

カムイ伝
第38回
赤目プロ作品
白土三平

カムイ伝㊳

（前回まで）

藩財政の窮乏打開策として目付**橘軍太夫**の提唱する〝非常法〟が採られたことによって、彼は永い間の藩内対立勢力であった城代家老**三角重太夫**を蹴落とし、藩の事実上の権力を掌中におさめた。これにともなって、かねてから城代家老の経済的支柱であった**夢屋**の存在も藩経済界の一線から退き、目付軍太夫と結託する御用商人**蔵屋**の立場は、いよいよ確固たる地盤を得たのであった。

同時に、ここに藩窮乏財政打開策が新たにスタートしたわけであるが、その具体的施策である藩札制度は、それがいざ実施されてみると、たちまち諸物価高騰の事態を招いただけでなく、その応機決策としてとられた増札も、さらにその悪化を煽るだけのものでしかなかった。こうして領内経済は急速に混乱に陥り、領民の生活は著しい苦境に追い込まれていった。とりわけ、この事態に最も大きな打撃をこうむったのは、百姓、それに、他領からの出稼人夫らであった。百姓はその生活をつなぐためにやむなく年貢を納めたあとに僅かに残された保有米はもちろん、来年の作付けに備えたはずの種籾さえも吐き出し、また、他領からの出稼人夫らの場合は、藩の他領への正銀持ち出し禁止の方針によって、藩札の銀札への交換を拒まれ、実質的に帰郷を足止めされたのである。ここに彼らの怒りと不安が爆発し、ついに打ち毀しの勃発となって現われたのであった。

ところで、この暴動鎮圧にあたって、そこに非人らの活躍が要求されたことは、先の差別強化の政策をさらに押し進め、一般の町人・百姓等と彼らとの溝をさらに深くせしめ、身分制度の徹底をのぞむ権力者たちの思うコースへの急速な進展であった。また、夙谷の者らが、こうした権力者への協力の中にしか生活の拠り処を得られないところに、社会のしくみのおそろしさと悲劇の根元があるのである。そして、夙谷の唯一人の例外者であり、その並すぐれた能力と決意によってこの群から個人的に飛躍し得たはずの**カムイ**でさえ、その飛躍が結局は同じ次元の中のものでしかなかったことからしても、そのしくみの網の目からやはり逃れ得なかったし、百姓娘との恋に陥った**ツクテ**に対する非人たちの掟裁きにしても、そこで裁かれる者がツクテであると同時に、差別のしがらみに組みふせられた自分自身であるといった皮相でしかも悲劇的な世界を浮き出さずにはいないのである。

藩札制度は、札価値の著しい下落によって、ただでさえ領内経済を悪化させていたにもかかわらず、そこへ新たに大量のニセ札の流出が加わったことからますます混乱の度を深めていった。もちろんこの陰には、藩経済を収拾不可能な状態にまで陥れ、そのことを利用して蔵屋の失墜、さらには藩権力に対抗し得る立場を奪回しようとする夢屋七兵衛の策謀と暗躍があるのであるが、名ばかりの家老職は保っても、その実質を奪われた城代三角重太夫がこれに手を携えないはずはなく、さらに彼はおのれの地位・勢力の奪回のためには、この混乱の中でとうぜん予想される百姓たちの一揆さえも、その絶好の機会として利用しようとさえしているのであった。

正助に先がけて一揆に立ちあがった**ゴン**ら若者組の者らの眼に、正助の立場が一見消極的に映ったかもしれないのは、実は正助が城代のその面の心底を悉知していたからにほかならなかったのだ。夥しい犠牲をともなう目前の権力へのきびしい反抗が、敵対する別の権力を結果的に支援することになる、そのことを考えたのであった。だが、若者組の者らの成長は、正助のその懸念を乗り越えるほどの逞しさを見せ、〝たとえ誰に利用されようと一揆はあくまで自分たち百姓のもの〟とするのであった。ここに至ってはじめて、正助も彼らとその行動を一つにしたのであった。

いっぽう、目付、蔵屋の実権派の用心棒的な立場にありながら、いまや時として彼らをリードするまでに藩内事情に長けた**玄蕃**は、城代の意図をいち早く読みとり、あるいは一揆を予想して彼らを突き動かすいっぽう、ひそかに実兄である目付橘軍太夫を暗殺してその権力を掴み取ろうと策しているようだった。かつて**カサグレ**の口から吐かれ、玄蕃にあっては重ねて吐かれる〝権力は奪い、云々〟の言葉には、百姓等からの搾取の意味のほかに、なにかしら不気味なものをも感じられるのである。だが、カサグレの案内によって玄蕃のこうした野心と、自分を葬り去ろうとした事実を知らされた**橘一馬**が今後どのように自分を鍛え、彼に向かうか、また、正助ら百姓の生き方に心を奪われながらも、決然としてふたたび武士として生きようと決心した**竜之進**が今後どのような道をとるか、いまはまだこれらは不明である。

月刊漫画 **ガロ** 二月号 目次

表紙絵・**白土三平**

カムイ伝が第1回から入手できます！

愛読者の渇望に応えてバックナンバー再版

第1冊～第6冊（第1回～第12回）頒布中！

早くも三年余の歳月を数えた白土三平先生畢生の
大作「カムイ伝」を第1回からこの機会にぜひ！

—カムイ伝再版促進会—

カムイ伝の第1回から第12回までを、6分冊にして再版しました。
第1冊（カムイ伝①②）から第6冊（⑪⑫）まで全巻頒布中です。
カムイ伝の再版（第一次）は、一応これでおわりました。これは、
希望者頒布・限定出版で、書店では一切発売しておりませんので、
誌代（送料含む）を添えて、直接下記へお申込み下さい。
なお、5分冊とも「ガロ」の本誌と同じB5判です。

頒価 各冊 230円 〒20円（切手も可・但し1割増）

申込先・東京都千代田区神田神保町1－55　**青林堂**内　**カムイ伝再版促進会**

切手代納の場合は、なるべく15円切手をお送り下さい。

〈ガロ〉特別セール案内

バックナンバーの部

今、全国で爆発的な人気を呼んでいる白土三平の大河マンガ＜カムイ伝＞は39年12月号から本誌に連載されていますが、これをはじめからお読み下さる方々のために、バックナンバーの特別割引セールを実施中です。

〈ガロ・在庫セット〉

41年4月号～42年1月号

10冊・1組 特価 1,300円

（〒1組・100円）

セットのほかに、1冊でも分売いたします。ただし、41年3月号までは品切れです。（1冊送料共150円）

新刊予約の部

月刊雑誌“ガロ”を、少しでも安く、しかも続けて読みたい方々のご要望にこたえて、次の通り特別予約セールを実施いたしております。

〈Aコース〉　6カ月分予約前納の方には、800円に割引の上、「白土三平傑作選集」(130円) を無料進呈します

〈Bコース〉　1カ年分予約前納の方には、1,600円に割引の上、白土三平の単行本を1冊無料進呈いたします。

★郵便料金の値上げに伴い、今後のご予約には送料（Aコース·100円、Bコース·200円）を申し受けることになりましたのでご諒承下さい。

申込先・東京都千代田区神田神保町1の55　青　林　堂

〝歩道と車道の「民主主義」〟

上野昂志

ぴかぴか光ったジュラルミンの盾、警棒、灰色の装甲車というものは、マスコミや良識ある人々の好んで口にする「民主主義」という言葉を常にあらわにしてしまうのである。それらのものは、「民主主義」という言葉とそれに付与されていた様々のイメージとの間を一瞬よぎって突出する。ここにおいて、盾や警棒などの物は、「民主主義」という言葉を具象化する物であると同時に、「民主主義」という言葉を裸に、ただの言葉にむきだしにしてしまうものでもあるのだ。

このことは何も「民主主義」の内実が失われたなどという現象ではなくて、現代の「民主主義」の実質とは、たかだかその程度のものに過ぎないことを意味しているのである。それを、あたかも山の彼方の空遠くに住む理想像のように「憲法」を理念的に解釈して、日本ではまだ「民主主義」が実現されていないとか、憲法が犯されているという風に論ずるからおかしなことになってしまうのである。所詮、そのような論議は、国家権力による「民主主義」の量的縮小に対して量的拡大を目指すものに過ぎないのであって、体制内にとりひきでしかないのだ。体制にとって、そのような論議は、その体制が「民主主義」であることを示すためにも必要不可欠なものなのである。

11月12日の羽田空港では、片やターミナルビル屋上で自民党青年部を中心とする「佐藤訪米応援団」が「佐藤総理がんばれ!」の喚声を上げると、片や送迎デッキに陣取る社共両党の抗議団が「訪米反対!」のシュプレヒコールをしていたそうだが、この羽田空港の情景こそ「民主主義国家日本」を象徴しているのである。体制にとって「応援団」は必要だが、それが「民主主義」であるためには、合法的な反対者も又、必要なのである。といって、合法的な反対自体が無意味なのではない。ただそのような反対が、合法の枠内にある限り、それによってせいぜい可能なのは体制内改良でしかないという自明の事実を知る必要があると言いたいのだ。合法闘争が政治的現実において一定の意味をもち得るのは、それが、所詮、体制内改良でしかないという痛覚をもって行われ、それを超える闘争に対して開いた関係をもつときだけなのである。

その痛覚をもたないものが、意識的にせよ無意識的にせよ自からを反体制と位置づける時、それ自身、最初は悲劇的な、以後は喜劇的な、体制の飾り花でしかあり得ないのだ。

安保から日韓を経て10・8、11・12羽田闘争への時間の経過は、警備体制に焦点を当ててみれば、その強化の過程であったと言えるだろう。警棒、防石網、催涙弾、ジュラルミンの盾という武器の量的増大と質的強化という目にはっきり見ることのできる変化は、そのまま国家権力の暴力的本質を外化したものにほかならない。遂に、それに相対する私達は、警棒や催涙弾に直面することによって私達内部

に凝縮していた幻想から自由になる。その時私たちは、自身の内部において「民主主義」神話を放棄しているはずである。

　ところで、現在の「民主主義」は、その内実である強権を常に警棒や催涙弾を通じて表現するわけではない。「朝日ジャーナル」11・26号で、11月12日昼すぎに高速道路入口で京浜急行の定期バスを止めた機動隊の隊長が、約30人の学生風乗客の検問結果を聞きながら、「おとなしいところからすると民青系らしいな。かたまらないようにして、デッキへ上げてやれ」と確信にみちた指揮ぶりをしていたと報じているが、ここに「民主主義」のもう一つの表現がある。即ち、「俺たちはデモそのものを禁止しているのではない。ただ暴力デモがいけないのだ」という論理である。そして、マスコミや良識ある人々がよりかかるのも又、この論理にほかならない。「聖域」の設定、コース変更、「静かなデモ」「暴力デモ」等々様々の「許可の暴力」の行使の果に、この論理がとりだされた。

　この論理をわかりやすく言えば、「言う通りにしていろ、そうすれば悪いようにはしない」ということに過ぎないのである。従って、その言葉の裏には当然「言う通りにしない奴は、叩き殺す」という意味が含まれているのは御承知の通りであって、いずれにせよ強権の本質が透けて見えるはずである。ただ、警棒と催涙弾による露骨な表現と、「言いつけを守る子はいい子」という婉曲な表現との幅の中に、今になっても「民主主義」神話のはびこる余地があるのだ。

　ところで、「言う通りにしている限り悪いようにはしない」という強権の論理は、デモの隊列に向ってだけではなく、歩道を埋めている「見物人」の内部をも貫いているのである。かすみ網を想わせるグリーンの防石網、催涙弾、警棒で身を固めた機動隊とぶつかる路上のデモ隊と、固まり合い首を伸ばして事の成行きを眺める歩道上の群衆とを等しくとらえている国家権力は、その質において何ら変りはない。にもかかわらず、一方が「暴徒」としてなぐられ、他方が「一般大衆」として扱われるのは何故か。それは、「言う通りにしている限り悪いようにはしない」という強権の論理が、歩道上の人人の内部で「あそこであんなことをしないかぎりなぐられない」という言葉に置きかわっているからに過ぎない。

　「一部暴徒と一般大衆」という対立の図式を支えているものは、強権の論理でしかないのだが、その対立の溝を極大に表現しているのがマスコミであり、極小に見えるのはデモが行われている現場である。

　警備車のマイクから、まず「通行中の皆様、まもなくこの附近をデモ隊が通りますので、歩道に止まらないで歩いて下さい」という声が流れる。ところが実際にデモの隊列が見えはじめると「見物人」は車道にまで走りだしてその光景を見に行く。その時になると、機動隊は「一般大衆」を車道に出ないようにするだけで手一杯という状態になってしまう。歩道を歩くことから止まることへ、止まっている状態から車道へ歩み出るという「見物人」の動きは、そのままデモ隊の動きに対応しているように見える。だが、それは今のところ機動隊を中にして平行的に対応しているに過ぎないのであって、その限りにおいて強権の分割作戦は、私たちの内部で依然として力をもっているといわねばならない。しかし、デモ鎮圧にヒステリカルにさえなっている強権な、歩道上の「一般大衆」の動きに対してもヒステリカルな反応を示しはじめていることに、私たちは気付くのである。その強権の表情は、今後更に一層激しい弾圧に移る姿勢をあらわにしていると同時に、意識されざる深甚な恐怖をもあらわにしているのである。

（67年11月20日）